/特/集/
まえがき

哲学はなんの役に立つのか

島崎　隆

アメリカのマイケル・サンデル教授の「ハーバード白熱教室」の哲学ブームが，近年注目されてきた．彼の『これからの「正義」の話をしよう―いまを生き延びるための哲学』（早川書房，2010）も40万部以上を売り上げ，ベストセラーになった．かつて1995年ころ，ノルウェーの哲学教師のヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界 ―哲学者からの不思議な手紙』（NHK出版，1995）が，日本でも180万部以上の大ベストセラーになって以来の哲学ブームであろう．さらに，自然環境の破壊，臓器移植や終末医療，企業や経営，インターネット・携帯などによる情報のあり方，などの現実問題が問われている現在，環境倫理，生命倫理，企業倫理，情報倫理などの倫理学も一定の注目を浴びている．

また，哲学そのものではないが，「資本主義の限界」が指摘されるいま，マルクスや『資本論』の原理的認識についても，実に多くの著作が書かれている．

だが，これらのブームについていえば，哲学が経験的な事実や現象を直接に扱うのではなく，そのより深い解明のために世界観，原理，方法，人間のあり方などをあえて問うて，そこから改めて現実問題に向かうものである以上，上滑りの流行やブームは本当の哲学ではないといえよう．

哲学と現実問題の関係を論ずるにあたって，まずここで，哲学の内容について最低限確定しておく必要がある．というのも，テツガクほど日本人にとって馴染みのない，わかりづらい学問はないからである．いま述べたように，哲学は，自然・社会・人間のありようを総合的に追求する世界観という側面をもっている．それを前提に，いかに行動すべきかという倫理や道徳の学，さらに価値論が含まれる．また哲学には，いかに現実を認識して批判すべきかという方法論（論理学，認識論，弁証法）という分野も必須である．

碓井論文は，ロールズらの正義などという倫理的概念が現実にいかに関わり，有効であるはずなのかを示す．通例日本では，「正義」は，政治や経済の領域では，飾り言葉でしかない．しかし，その事実がかえって，この国の閉塞状況をつくっているのではないかと示唆する．**高田論文**は，生命とは何かという大問題を中心に，自然環境問題や遺伝子操作，脳死判定などの医療問題を総合的に扱い，哲学・倫理学の立場から，科学・技術の果たすべき方向性を展望する．**田島論文**は，利潤追求を中心とする企業がいかにして社会的責任を果たせるのかを追求する．こうして企業倫理学は，企業の不祥事や犯罪を防ぎ，社会的利益を促進する経営を奨励する．**島崎論文**は，現代日本の教育分野の閉塞状況を指摘しつつ，そこに哲学・倫理学がいかに積極的に関われるのかを示そうとする．**石井論文**は，哲学のもつ「批判＝批評」的実践の機能を強調する．そこでは多くの事例が提起されて，「境界線」を鋭く引く作業によって，真なる客観的認識を達成しようとする．

以上の各論文は，現実が提起する問題に，哲学がどのように役立てられるのかを中心テーマとして，展開されている．抽象的な哲学も，文献解釈に終わることなく，現実問題にいかに関わろうとするのかを説得的に主張すべき時代となっているといえよう．

（しまざき・たかし：一橋大学，哲学）

日本の科学者47-2-2.indd 67　11/12/16 11:22